千葉に建築を訪ねる

四　千葉市美術館と鞘堂の成果

建築家　三沢　浩

新建築家技術者集団の第二〇会大会が千葉市で開かれたのは、一九九五年一一月のことであった。その折に昼休み利用の見学会があって、出来たばかりの大谷幸夫設計の「千葉市美術館」を見た。そのような折でもないと大谷個人が出て来て説明をして、しかも見学会の案内をすることもないと思われるのだが、確かに本人が来て説明をした。彼は一階の「旧川崎銀行千葉支店」の鞘堂ホールの中央で、数十人を前にして静かに話し始める。例によって小さな声だが比較的良く通る声で、しかし綿密なしゃべり方は昔の通りで、しかも正確に事の推移を告げ、その設計の由来を語った。ホールの彼の近くにいないと、全体の細部は聞き取れなかったのではないかと思うが、元々このホールは音響に注意して修復されたものであり、しかもその上に柱や二階の出っ張りなどのせいか、このような元銀行ホールにありがちな、残響ばかりが大きくて、声が割れて聞き取りにくいということはまったくなかった。

当日参加した千葉支部の人々、この見学会に参加した全国からの会員は、この建物の由来も特徴も、そして意義も充分にご承知のことだろうが、改めて簡単にまとめたい。

千葉市の中央を南北に貫く国道一六号に沿って、かつてのビジネス街の中心に建っていた「川崎銀行千葉支店」は、一九二七年に建てられた。しかし千葉市中央のこのあたりの変貌は著しく、市街地としてまたビジネス街としての役割を終え、古い建物に歴史はあっても更新に忙しく、次々に新しいビルに変わりつつあった。

敷地の場所は旧都心部ともいわれたのであるが、ここに市立美術館と中央区役所の複合建築が提案された。それに対して設計者は古いものの保全と新しい施設の競合に対して、確固たる手段をとった。この旧建物の存在理由を明らかにした上で、期待された規模と機能のすべてを満足させることを図り、結果として「鞘堂」方式による旧建物の保全と、美術館、区役所を上部にとり込むことに成功した。これは珍しい成果といわねばなるまい。

「ここで試みられた鞘堂方式はこれがはじめての事例であるが、発展を続ける現代社会が引きずってきた歴史性の喪失、という体質上の問題に対する私なりの取り組みであり、今回限りの特殊解に終わらせることだけは回避したいと願っている」（『新建築』一九九五年四月号）

このように大谷はのべているが、一般論としての歴史的建物の保全は、ようやく対象になりながら、それでも数えるほどしか成功していない。従ってこの特殊解は、それ以来五年経ったが一向に一般解にならないでいる。ひとつにはこの千葉市の例のように、自治体が土地を求め機能を求め、理解をもって東大名誉教授のいう、主張をとり入れるような例が、極めて稀であるということに尽きる。歴史と現代はいつかな融合と理解を深めようとはしないのである。

特にこの例で優れていることは、現地保存であること。それも地下構造物をつくり、その上に載せるために、背後に一旦曳き家をして、また戻すという方法をとり、六か月の工期の延長をした。また石造の建物を法的に耐火建築にするために、表面の石をそのままにして、裏にコンクリートを打ち込んで補強するなど、これは他の保全例にもあったのだが、苦労して原形を維持したという実績を評価したいのである。

こうして保全された元銀行は、カウンターなどを取り払い、新たに美術館と共に公共建築の一部となり、市民ホールとしての新たな出発がはかられた。先程の大谷幸夫の声が良く通ったのも、実は音響に対する特性の検討がなされ、前面道路の国道の交通騒音を遮断し、ガラスを追加したり注意をしているからこその効果であった。

中央区役所の機能は三～四階の事務室であり、最も大きなことは四～五階間のバッファーゾーンと呼ばれる空間を隔てた、上部部の市民ギャラリーと展示室、そして最上階の講堂ということになろうか。これらについて細部の説明は設計者からは特になかったのだが、市民ギャラリーも展示室も、全面拡散ルーバー天井で壁面があるだけ。残念なことに当日は記念展が催されていて、時間が短くて見ることは出来なかった。

従って一一階の講堂とその南北にあるテラスから、市街地を見下ろすことで終わった。この講堂は特に段状座席はつくらず、平土間の多目的ホールである。但し天井は外観でみる階段状のせりあがりがそのまま室内で見られ、トップライトをもっていて見所があった。

ここで大谷教授は「この段状形体は意図したものでなく、セットバックをそのまま正直にあらわしたもので特に意味はない」という。しかしそれを聞きながらも、どうしてこうなるのかという疑問は頭を去らなかった。というのは彼の師である丹下健三が、青山に設計した国連大学は段状の立面をもっていたし、この方はセットバックとは見えない敷地の余裕があったから、意図されたものであると分かる。まさか師の真似とは思わぬが、装飾的な目的があったのではないかと勘繰って聞いたのだった。同時に各テラスの手すりの鳥の羽のデザイン、講堂の東西の窓の外の装飾、さらには最上階の屋根の鳥の羽のような意匠とも合わせて、特にこの鳥の羽が駅側つまり西面だけが朱色に塗られ、駅の方から良い目印となっていることも考え、大谷デザインの一端を垣間見たような気がしたのだ。

大谷幸夫には「京都国際会館」や「金沢工業大学」などの作品にもあるが、複雑な構造を持ち前の装飾としてきた所があり、それが「白い直角の近代建築」ではない証拠であったのである。この千葉にあっても、かすかながら「ポストモダン建築」の名残りがあって、鞘堂を囲む一階の巨大な円柱もキャピタルをつけて意匠にしている。もちろん「旧川崎銀行」の正面を特徴づける、コリント式キャピタルの石の円柱をなぞらえたものであることも分かるのだが、独自の装飾への回帰を感ずる。ここで果した「鞘堂ホール」の考え方は、もっといえば昔と同じ位置にあって欲しかったのだが、古い建物を永く持たせるためのガラス囲いとあれば、それも仕方のないこと。古い建物が或いは石造の歴史様式建築が、ひとつでも残されたことは千葉市の文化のためにも讃えるべきである。

（続）